れゝ小僧の。此地等へ鳥打遊びゐ御來臨になつさのの、直彼家が我の旦那が家あれば休んでなと行つしやれと云ひながふ早くも駈け出して、下駄を一間も跳ね飛ばしつゝ臺所口より駈け上り、突然旦那様旦那様と急たる聲で呼びのけ、何心なく庭前の菊見て居たる彦右衛門を驚かせける

第百　めでたし〳〵

あれゝ御珍ふしや、不思議の御縁で御眼まのゝりますと彦右衛門挨拶すれば、磯貝も調子よく。其後御變りも無うて何より結構御悦び申しあげまそると應答して、導のるゝまゝ衡門くゞり奥庭ま入り、南向の座敷れ縁側に腰打ちのけんとする時。まづ〳〵お上りなされませ、梅吉何を迂濶々々して居る、御靴の紐を解いてわげぬのと世馴れたる彦右衛門が接待ぶり、磯貝も庭の石燈籠の古び工合を賞め

なぞしながふ終局ゝ座敷に上り込み、鐵砲を書生お遞與して、獲物袋の中より鳩鵠なんど取り出し、まれゝ一羽に十發もの苦勞を籠めて獲りしものながふ御土産まあぐるあをば汝より調理して旦那様の晩御膳れ節にまと進ふせよと笑ひ〳〵梅吉お與ふるに、彦右衛門も莞爾つきながふ、大した御土産あり難く頂戴いたしまするど戯れて答ふる傍、れ染を呼べと婢女に云ふ間もあふせ母の指揮にて茶をもつて立出づるお染、挨拶も口の内まて耻のしげま俯伏ける風情ひとしゝ美しく、磯貝も今更あふたまりて少しゝ鼻白みしの、老功の彦右衛門一座を淋しうするやうな事なく、旅館にての事艦までの事など種々云ひ出してと笑ひ興じ、頃て田舍漢の手料理貴下方の御口には合ふまじけれどといふを冐頭にして芋鷄胡羅蔔れ雜煮薯蕷うけ豆腐小松菜のひたし物燒岩魚の煮浸まんどを下物に、食ふていよ

しや美味のふぜとも芳志と充分見せて酒を佑むるゆゑ、傷み入る恐を入るを口にと云へど心嬉しく、快活氣ゆ磯貝も幾杯を傾くをば、客の機嫌よきに主人も滿足して、互に談話途切るゝ事なく、耳熱くある頃と益々膝をすゝめ合ひての浮世雑談、遂に漸く親しくなりて其夜と一泊の厄介ゆ磯貝あづのりけるが、それよりれ染ゆも馴き一家れものにも親み深くなり、歸京して後禮狀に添へて立派なる餽物をなせば彦右衛門方にてもまた其ゆ酬い、書簡の往復もやゝ繁くなまさりけるが、遂に彦右衛門磯貝に頼みて、磯貝が朋友なる彼艇長の手をもつて荒磯大尉の素性きゝしに、紛れもなく我が子の新太郎が人ゆ拾ひとふれて生長たるありければ、天地を拜して嬉し悦びける

彦右衛門お染を我ゲ思ふ通ゆ磯貝ゆ歸去て後、額に汗をにじませなが生月よての一條語ゆ出し、何卒好き機會を得て我が子ではありなどふ我が謝罪ふねばあらぬ荒磯大尉に面を合とし、逐一當時の狀態を懺悔あしたき由を頼めば、磯貝且つ驚き且つ贊嘆ゑ、遂ゆ或時荒磯を引き逢とゑぬ、語るも聞くも涙ゆて彦右衛門が長々ゑき懺悔、そゝろゆ六つの秋を濕ふゑけるが、それより天蒼く日鮮のに、頭上一點の翳なく彦右衛門一代を終ゆけるよゑめでたゑ〳〵

いさなとり終

明治二十五年三月十五日印刷
仝　二十五年三月十七日出版

定價金參拾錢

版權所有

著作者　東京市京橋區南傳馬町二丁目十四番地寄留　幸田露伴
發行者　大阪市東區北久太郎町二丁目六十六番屋敷　青木恒三郎
印刷者　大阪活版製造所印刷部　辻田榮助
製本所　大阪市心齋橋筋安堂寺町　青木嵩山堂
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　青木嵩山堂
仝　勢州四日市港堅町　嵩山堂分店

68
133

Gift
1882